

50

慶應義塾大学法学研究会 編
『教養論叢』第121号・2004年2月

コンテクスト化と指標性の二義性について

井 上 逸 兵

On Ambiguity of Contextualization and Indexicality

—————INOUE, Ippai

—— Kyoyo-Ronso No. 121 (2004) ——

コンテキスト化と指標性の二義性について

井上逸兵

1. はじめに

本稿では日本語の言語使用におけるコンテキスト化 (contextualization) と指標性 (indexicality) の多層的な性格, 特にその二義性について論じてみたい。「でいい」, 「結構です」などの表現の曖昧性と丁寧な接頭辞とされる「お」が生み出すアイロニックな含意を材料として, コンテキスト化のプロセスと指標性の働きにおける二重性について考察しようと思う。それによって, 言語的, 非言語的な伝達と解釈のありようの一側面を明らかにし, 相互行為の社会言語学 (interactional sociolinguistics) の枠組みにおいて, 言語アイテムが内在的にもつ相互行為性を論ずることが本稿の目的である。

ここでは, それをするのに Hayashi (2001, 2002) の「でいい」の議論を出発点にしたいと思う。基本的にそれらの議論を土台として, それらの主旨とはやや異なった方向に議論を展開してみたい。

2. 理論的背景と先行研究

ガンパーズは相互行為の社会言語学の研究プログラムで, 言語変種とマクロ的な社会的要因との相関を超えて, 個人が築くネットワークによって形成され, 変容を受けていく言語変化と言語行動のモデルを求めた (Gumperz 1982)。この枠組みの中で彼は統語的な要素, 言語的変種, 慣用表現, イントネーションなどの韻律のパターンなどのパラ言語的な要素, 非言語的な要素などがいかに推論や解釈のプロセスに関わるかを論じた。そのような言語的, 非言語的のシグナルはそれ自体が指示的な意味, メッセージ内容を持つだけでなく, 「コンテクス

ト化の合図 (contextualization cues)」として解釈の枠組みを喚起し、当該の発話をどう解釈すべきかの手がかりとなるように配置されるとした。

コンテキストとは、簡潔に言えば解釈の枠組みを得るために参照する情報の集合であるが、それは一般に所与のもの、あるいは定的、静的なものと考えられてきた。しかし、ガンバーズはコンテキストが会話の参与者自身によってリアルタイムに生み出される側面に着目し、従来のコンテキスト観をよりダイナミックなものに革新した。相互行為のプロセスにおいて参与者は様々なコンテキスト化の合図を手がかりに他者の発話をどう解釈すべきか、どのような活動がそこで起こっているのか、自分に何が期待されているかななどを常に推論していく。従来の言語学では、ソシュール流に言えばパロール、チョムスキー流に言えば言語運用といった非本質的、周辺的とされてきた要素が彼の枠組みでは逆に中心となるのである。

隣人同士にありそうな次のような会話を考えてみよう (井上 1999)。

(1) A: お出かけですか?

B: ええちょっとそこまで

日本では何気ないこの会話もある文化ではあり得なさそうな会話であるかもしれない。A の質問がプライバシーの侵害として不適切なものと思なされる文化もありえよう。しかし、日本のある人たちにとって、A の発話はそのようには受けとめられず、意図するところは明白である。これは情報を求めている質問なのではなく、社交的な挨拶代わりにムーブと解釈されるだろう。そしてこの解釈を可能にするのは、半上昇調の強勢のない韻律であり (重要なことに、この会話の慣習を理解する人にとってそれを想像し、再生することは容易だ)、この定式的な表現形式なのである。

「お出かけですか!？」と驚きを含意するような強勢を伴った口調で発話されれば、B は出かけるか否かを問う純粋な質問と解釈したか、あるいは非難と解釈したかもしれない。また上のような漠然とした答えでは済まされないと感じる可能性もあるだろう。この韻律がコンテキスト化の合図となり、発話の解釈に

制約を与えているのである。また、韻律が慣習に則っていても、「お出かけですか?」ではなく、「どこかにいらっしゃるのですか」などと問えば、これも異なった解釈を誘発しうる。お決まりの定式的表現形式の定式性そのものが、この表現自体のコンテクスト化の合図となり、解釈を誘導するわけである。

これに連なる議論にシルバースタイン (Silverstein 1972) やオクス (Ochs 1990) の指標性の研究がある。シルバースタインはパースが記号の三要素の一つとする指標 (index) を発展させて、指示的 (referential) / 非指示的 (nonreferential) の二つのタイプの指標性を論じた (徳地 2001, 片岡 2002)。指示的な指標性とは人称代名詞やダイクシスなどの明示的な指示内容をもつものや、外延的な (denotative) 意味に関わるものである。一方非指示的な指標性とは、暗黙の社会的、文化的前提を土台に、性差や敬意など社会的関係、対人的関係を示すものであり、明示的、命題的な意味に対するメタ的な機能を果たし、コンテクストに関わる情報を伝達する。

オクスは発話の中で非指示的に指標される情緒スタンスや認識スタンスが多様なコンテクスト情報を構成するという指標性のモデルを提案した。彼女は言語形式としての音声的諸特徴、語彙・形態・統語的特徴、レジスターによって話者の情緒スタンスまたは認識スタンスが直接に指標され、遂行されている行為や活動、参与者の役割、相互の関係や社会的アイデンティティ、談話のジャンルなどが間接的に指標されるとした (湯川 1999)。例えば日本語の「ぜ」や「ぞ」は荒々しさなどの情緒スタンスを直接に指標し、それを媒介として間接的にある種の男性性を指標する。また「わ」は柔らかさを直接に指標し、ある種の女性性を間接的に指標するという。

指示/非指示という図式をより一般的に展開するために (1) の「お出かけですか」の対話に戻ろう。コンテクスト化のプロセスはシルバースタインのいう非指示的指標の作用と重なり合う。オクスなら近隣の者同士にあるべき社交性を連想させる情緒スタンスを指標するということになろう。「お出かけですか」はパラ言語等の働きによって指示的な情報を求めているのではなく、会話を社交的に始め、適当な時間維持しようという友好的な情緒スタンスを非指示的に指標するのである。

3. Hayashi (2001, 2002) の「でいい」考

本稿では Hayashi (2001, 2002) の日本語の「でいい」という表現が指標するスタンスとアフェクトの多層性と曖昧性に関する論考を、筆者なりの観点から評価し、また可能な議論の展開と思うところを述べてみたい。

林氏の議論を簡単に要約しておこう。コンテクスト化 (contextualization) と指標性 (indexicality) の理論においては、話し手のシグナルする合図 (cue) 等によってメッセージは解釈されるべき制約が与えられ、同時にそれがアフェクトやスタンスを明示的に指標するというモデルが想定されるが、それは日本 (語) のコミュニケーションには必ずしも適合しない。日本語 (および日本語によるコミュニケーション上の慣習) には二つ以上の社会的な意味 (スタンスやアフェクトなど) を指標すべくコンテクスト化の合図を利用する資源が備わっており、それによってメッセージとその社会的含意をあいまいに (あるいは多義的に) することが可能になっているのである。Hayashi は特に「…… でいい」という表現に焦点をあて、その多層的コンテクスト化のメカニズムを論じている。

Hayashi (2001, 2002) の論証は相互行為の社会言語学の枠組みにあって成功裡に、また説得的になされていると言ってよいだろう。彼女の論証の意義はまず一つに、「…… でいい」という日常的な言い回しに焦点を当て、その曖昧性を指摘し、その曖昧性を資源としてスタンスやアフェクトを指標するコンテクスト化のプロセスを言語学的な議論をベースに明らかにしていることであると思われる。議論の中身については後述するとして、まずこの点における林氏のアプローチの意味するところを考えてみたい。

言語は本質的に対話的 (dialogic) な性格を持っており、相互行為の中で意味が構築されていくものであるという言語観は、この種の (広義の) 社会言語学がもたらしたものであり、(これまた広義の) 言語学において正当に評価されるべき地位を占めている、あるいは占めるべきであると思われる。しかしながら、日本の土壌における言語研究にはいまだにこのようなパラダイムを必ずしも正当に評価しない、あるいは消化しきっていないところがあるように見受けられる。

ハイムズらに始まるコミュニケーションの民族誌 (ethnography of communi-

cation, Hymes (1974) など), ガンパーズらのコンテキスト化の合図の研究 (Gumperz (1982) など) のいわゆる相互行為の社会言語学 (interactional sociolinguistics) もしくは言語人類学, エスノメソドロジーおよびそれから会話分析として先鋭化した研究プログラム (Sacks, Schegloff and Jefferson (1974) など) などはアメリカにその拠点があると言ってよいと思われるが, 社会構築主義的な思想的潮流に見られるようにこれらの諸分野の垣根は場合によっては積極的に無意味とされる。しかしながら, 学問的風土の違いもあって主としてアメリカで成長したこの分野の研究は日本ではいまだに受け入れるに適切な場所を見いだしていない状況にあるといってもよいだろう。

エスノメソドロジーの研究プログラムにある会話分析や, コンテキスト化や指標性の研究に代表されるような相互行為の社会言語学や, ナラティブ研究などのエスノグラフィックな言語人類学的な論考や, 英国にその源の一部をもつクリティカルディスコース分析 (いわゆる CDA) などは, 言語上の規則性や内的な構造の分析やそれらの一般化よりも, ディスコースが構築されるそのプロセスにこそ重要性を見いだそうという問題認識を共有し, それは社会的な文脈における言語研究にある種のパラダイム転換を成し遂げたように見える。先ほどもふれた「相互行為における言語 (意味作用)」という視点は間違いなくこれらの研究群がもたらした知見である。しかしながら, きわめて残念なことに, 筆者の観察する限り, この種の議論は日本の「言語学的マインド」の研究者たちの関心にはあまり訴えかけるものは多くないようである。この「言語学的マインド」の持ち主たちとはひとえに生成文法論者に限った話ではない。たとえば, 本稿で Hayashi の議論を筆者なりに展開した後論ずる視点もかなりの程度に認知言語学, 認知意味論のそれとオーバーラップしているが, 彼らの問題意識が向いているのは社会言語学的な意味における相互行為ではなく, どちらかというところ「孤独な認知」(京都大学山梨正明氏個人談話) である。

そのような日本の状況にあって, コンテキスト化や指標性などの研究が展開されうる一つのアリーナは言語学であろう。その意味で Hayashi のアプローチは日本の言語学的な議論の場において, アメリカ的な相互行為の社会言語学の流れをくみつつ, 言語学的にも十分な説得力を持った研究パラダイムを構築す

るための建設的、生産的にしてかつ有意義な試みと見ることができる。彼女はいくつかの不変化詞の語義的な意味を議論の出発点に、その複合的な使用の際の複合的な含意を土台として、すなわち(狭義の)言語学的切り口から論じ、相互行為の社会言語学の中心的な問題のうちの二つであるコンテキスト化と指標性にアプローチしている。「言語学的マインド」の関心にも十分に応えられるものではなからうか(むしろ、「好み」の問題は残されるが)。

4. 「でいい」の二義性のメカニズム

さて、議論の内容について論じてみたい。

Hayashi (2001, 2002) の「でいい」の曖昧さが資源となって生み出される社会的意味の多義性、曖昧性の議論は基本的に説得的である。また、「でいい」は相矛盾しあうようなアフェクト(たとえば「学生でいいです」は「学生は最良の選択ではない」が「学生で十分である」という二義性を持つというような)をも指標すると論じられているが、その指摘自体も有意義だろう。

「でいい」のこのような曖昧性は筆者に「いいです」、「結構です」などの表現の曖昧性を思い起こさせる。これらの表現も「(積極的に、文字通り)よい」という肯定的な評価を意味する場合と「もう十分だ、いらぬ」ということを意味し、それによっておそらく否定的なスタンス・アフェクトを指標する(日本語非母語話者にはこの曖昧性に戸惑うものが少なくないと聞く)。

これもあわせてこれらの現象の統一的な説明は可能だろうか。本稿の後半では、林氏の議論を展開し、若干異なった視点での説明がありうるかを問うてみたい。二義的、あるいは多層的コンテキスト化のプロセスという観点から見ようと思う。すなわち、「でいい」によって潜在的に想起されうるコンテキストなりフレーム(あるいはアフェクト・スタンス)は複数あり、ある場合にはあるフレームが前景化され、また時には別のフレームが後景化されるという見方である。いうまでもなく、この見方は Duranti and Goodwin (1992) などに見られるこの分野の認識の一つであり、前述したように認知言語学とも通ずる説明原理である。そして、さらに井上(2003)で論じた「コミュニケーションの生態学」

的な議論への発展の可能性にふれてみたい。

たとえば、林氏が慣習的な使用とするレストラン等でのウェイトレスの「でいい」を取りあげて考えてみよう。

(2) (フィールドノート)

ウェイトレス：ご注文は

客 (1)：カツ定食

ウェイトレス：カツ定食でいいですか (客 (2) を見る)

客 (2)：A 定食

ウェイトレス：A 定食でいいですか (客 (3) を見る)

客 (3)：わたし焼き飯

ウェイトレス：カツ定食と A 定食と焼き飯でいいですか

客 (4)：はい

(Hayashi 2001)

彼女は「カツ定食でいいですか？」の「でいい」によって、ウェイトレスはその客が注文したその食べ物（カツ定食）はそのレストランの最良のものではなく、その質と量が客にとって受け入れ可能なものかどうかを問うているということを示していると論じている。それによってウェイトレスはそのレストランの食べ物を低め（したがって自分たちレストランの人間もおそらく低め）、客を上位者に、自分（たちレストランの者）を下位者におくという社会的な関係を構築し、同時にそれに伴う自己弁護的なスタンスも指標しているというわけである。

この観察は妥当なものであり、彼女が慣習的としているように多くの場合に当てはまるだろう。しかし、「カツ定食でいいですか（あるいは、よろしいですか）」と店員に問われ、「おまえはそんなものしか注文しないのか、その程度の人間か」という否定的な（あるいは非難がましい）アフェクトを感じとってしまうのは小心者の筆者だけだろうか。居酒屋やハンバーガーショップで（一人につき複数の注文が想定されやすい店で）注文したあと「以上でよろしいでしょうか」と問われて、「おまえはそんな少ししか注文してくれないのか」というこれまた否定的なアフ

エクトを感じる人はいないだろうか。彼女のあげている「キリマンジャロ 100 …… 200 グラム」はそういう例ととりうるだろう。

(3) コーヒーショップ (録音会話)

客：キリマンジャロ 100 グラム

店員：100 でいいですか

客：ううんっと に ううん はい 100 でいいです

(Hayashi 2001)

A クラスのメニューがあるのに (あるいは、より多量の注文が可能なのに)、それより下位の B クラスの注文をして「…… でいいですか」と問われれば、(「それで勘弁してくれますか」という自己弁護的なアフェクト・スタンスよりも)「それで満足なのか、その程度か」というアフェクト・スタンスを感じてしまう場合があるだろう。最近はそのような含意を避けるために「…… でよろしいですか」といわずに「…… ですね」と答えたり、ただ謝辞をもって注文を受け入れるようにしている店があるように思われる。(実際は「…… でいいですか」と問われて感じる不快感はもう少し複雑だろう。すなわち上に述べたように「あなたはそんな程度のものか」と低められているようなアフェクト・スタンスと、もっと値段の高いメニューがあるのにこの程度のものしか注文してあげられない、あるいはこれくらいの量/数しか注文してあげられないことに対する「申し訳ない」気持ちが意識される (あるいは、そこに加わる) 場合もあるかもしれない。)

林氏は言語行動の有標/無標 (marked/unmarked) 性がアフェクトやスタンスなどの社会的な意味を引き出すことに関わっているという論考の中で、慣習化されている (conventionalized) ことを無標ととらえている。たしかに慣習的な解釈がデフォルトであろう。しかし、このようなアフェクト・スタンスをも説明するとするなら、むしろそのような意味での有標/無標という対立ではなく、ある潜在的に可能なアフェクト・スタンス、あるいはフレーム、あるいはコンテキスト情報の中で、前景化/後景化 (foregrounded/backgrounded) というプロセス (あるいは図と地 (figure/ground) という関係) があるのであり、それを問うという視

点はありえないだろうか。

「でいい」を資源として想起されうる参加者のアフェクト・スタンスは基本的に二つ考えられる。一つは(1)それで十分である、それ以上はもったいない、というような満足であり、いま一つは(2)それで我慢してやろう、妥協してやろう、というような許容だろう(いずれもアフェクトあるいはスタンスを指標している)。(1)はすなわち充足的な受容であり、(2)は妥協的な受容である(「満足する」をおおよそ意味する英語の'satisfied'と'content'には「積極的満足/妥協的満足」という対立がある場合があるとされるが、このように語彙化されていることは日本語の「いい」が曖昧性を持っていることと象徴的な対照をなすと考えてよいかもしれない)。それぞれの事例においてはこのいずれかのスタンス・アフェクトが前景化、あるいは焦点化(focalize)され、もう一方が後景化されるということになるだろう。

付随的に生ずるスタンス・アフェクトとして重要と思われるのは、妥協的な受容が「許可」を含意することである。受容者(「……でいい」と思う主体)が話者自身である場合、充足的な受容というフレームが想起されれば自己を低めるというアフェクト・スタンスを作り出し、妥協的受容のフレームなら許可を与える上位者であるところのアフェクト・スタンスを指標することになるだろう。対人的な関係の解釈の交渉はしばしば階層関係、あるいは力関係、すなわち上下という垂直的な関係の次元でなされる(Scollon and Scollon (1995)など)。

逆に、受容者が相手である場合(「カツ定食でいいですか」のように)、充足的な受容のフレームが想起されると、「おまえはそれで満足するのか、その程度でいいのか」という相手に対する非難を暗示するようなアフェクト・スタンスを指標し、妥協的な充足のフレームでは「それで勘弁してもらえますか、(私の提供する)『カツ定食』があなたの水準に満たない、つまらないもので申し訳ない」という林氏のいうような自己卑下的なアフェクト・スタンスを想起する。

(4) 娘のアパート (TVドラマ)

(父が娘のアパートを訪ねる。娘はキッチンから)

娘： お茶でいい？

(父は、キッチンとは壁で仕切られた居間のソファーに座りかけ、その顔を正面

に真直ぐ向けて)

父： ああいいよ。

(Hayashi 2001)

この娘が父親に対する「お茶でいい？」が「お茶」を低めることも「お茶でいい？」が許可を求めることになるのも同じ原理に基づいている。娘のアパートという物理的環境、父娘という関係を資源として妥協的フレームを想起させることで、娘は父に許可を求めているのである。

その意味で次の新聞のコラムの村上氏の「森さんでいいじゃないか」は権力誇示的と解釈されうることに理があろう。

(5) 「懲りずにまた“密室”？」

目はもっぱら内向き。その意味するところは単純だ。みんなが今の権力基盤を崩したくないのだ。昨年4月2日、ホテルの一室で、村上正邦前参院議員(受託収賄罪で起訴)が「森さんでいいんじゃないか」と口火を切り、森内閣は誕生した。今回も「〇〇さんでいい」という展開になりそうな気配。やはり、分かっちゃいるけど……なのか。

(毎日新聞 2001年3月27日)

(Hayashi 2001での引用)

「森さんでいい」によって「森さん」という選択は最良ではないが、許容できる選択であると社会的に含意されるが、妥協的受容、許容というスタンスが前景化されれば(あるいは、焦点化されれば)、それは自らを(許可を与える)上位者として位置づけるスタンスを指標することになる(BatesonやTannenならこれをメタメッセージと呼ぶかもしれない)。

次の新聞の投書の主婦が怒っているのも夫や姑が「でいい」によって自分を下位者に置くところのスタンスを指標しているからとみることができよう。

(6) 「〇〇でいいです」

スーパーに買い物に行こうとして、夫に「お昼、何がええ？」と聞くと、「ざるそばでえーわ」と、ダレた声で返事が返ってくる。姑にも「お昼、何がよろしい？」と聞くと、「そうやね、果物が乗った野菜サラダでいいわ」と言うのではないか。そろいもそろって「ざるそばでいい」「サラダでいい」とはどういうこっちゃ。「ざるそばがよい」「サラダが食べたい」となぜ言えん。

カッカしながらカンカン照りのなか、自転車をこぐ。2人が家の中で、クーラーをかけて寝ころんでテレビを見てると思うと、ますます腹が立ってくる。

レジで店員が漂白剤一本でも袋にいれようとするので、「テープ（を張るだけ）でいいです」と言いかけて、「テープにしてください」と言い直して品物を受け取った。

「〇〇でいいです」という言い方。私は大嫌いです。

（「言わせて・聞いて」毎日新聞 1999年9月7日）

（Hayashi 2001 での引用）

この投書の主婦には、家族におけるそれぞれの地位の差はそれほど大きいものではないか、あるいは大きくあるべきではない、という想定があるのだろう。レストランにおけるサービス提供者／受容者という関係とはわけが違うということである。しかしながら、この夫と姑の態度はむしろレストランの客のそれに近く、つまりは主婦が下位者に甘んじることになることがこの主婦を憤慨させているのだろう。もう一つのこの主婦の不快感は（この投書のコミカルであるところでもあるが）、「でいい」という、林氏のいうような責任放棄（「何でもいい」のような）というスタンスをとっていながら、やけに具体的にそして細かに「ざるそば」や（特に姑は非常に細かに）「くだものがのった野菜サラダ」と限定的に特定していることからくるものだろう。「でいい」がもし自己卑下的なアフェクトを指標するなら、この特定化はあきらかに（そしてコミカルに）矛盾する。この投書を例とした問題については、CDA的にジェンダーや社会階層の問題として論じることが可能であろうが、本稿の議論としてはそれはむしろ「後景化」されるべきであるように思う。

このような説明原理によって立てば、「でいい」はコンテキストに根ざした相

互行為の中でのみ解釈される一方で、この表現が解釈の枠組み、相互行為におけるスタンス、参与者間の関係などを指標し、むしろこの表現自体がコンテキストを構築しているという事実をより強調することになろう。これらの事例が典型的に示すように、そのような問題の切り口によって、言語がコンテキストに拘束され (context-bound)、かつコンテキストを生み出す (context-producing) ものであるという相互行為の社会言語学の基本認識に我々は立ち返る。筆者には林氏の議論の理論的な価値かつ貢献として、そこに焦点がおかれてもよかったように思われる。また、潜在的に指標するところのアフェクト・スタンスにおける前景化/後景化という理論的枠組みにたてば、先に筆者のあげた「いいです」、「結構です」なども含めてより統合的に説明できるだろう。

5. 「お」のアイロニー

次に同様の二犠牲、多層性が日本語において語彙化されている一連の表現群を取り上げてみよう。日本語の「御 (お, おん)」は丁寧語を構成する接頭辞であり、それ自体丁寧であるところのスタンスを表示しているように思われる。しかし、すべてが丁寧表現として実現されているわけではない。オプショナルにそれを付加することによって丁寧なスタンス (例えば、相手への敬意) を表示できるが、中には語彙に内包されていたり、それを付加することが慣習的に丁寧とは別のスタンスを非指示的に指標するものもある。例えば、

- (7) お住まい
お越し

のように、日常的な表現で、かつ通常の文脈では曖昧さなく丁寧であるスタンスを指標しうる表現もあるが、

- (8) 御会式
御隠れ

のようにある特定の宗教的、儀礼的敬意を指示するものもある。ここで問題としたいのは、字義上はこのような丁寧さを指標する特質をもっていながら、他者を揶揄したり、アイロニカルに用いる二義性をもっている表現群である。

(9) お荷物
お預け

などは、(7)と同様に丁寧さを指標することも可能だが、否定的、あるいは下位者に用いる表現としても用いられる二義性をもっている。「お荷物」はむしろ「荷物」の丁寧表現でもあるが、「負担となること、足手まとい」というような意味合いをアイロニカルに指示することもしばしばである。かつて、某宅急便会社が政界への不正資金調達で問題となった際、朝日新聞の時事川柳に「お荷物も荷物も運ぶ宅急便」という句があったが、これなどはこの二義性をうまく利用したものといえよう。「お預け」も丁寧な含意とともに、犬に対して用いるような下位者に対する使用が転用される際のアイロニカルな含意がある。「お預けをくった」は待たされたりした際の状況を揶揄した表現であろう。

さらに語彙化が進行し、否定的な含意の指標が定着したと見られる表現群もある。

(10) お生憎様
お里が知れる
お上りさん

などは否定的なスタンスを指標する状況でのみ用いられる表現である。これらの一連の表現群が否定的、アイロニカルな含意をもつことに対する一つの可能な説明としては、表面的な丁寧さが距離を作る装置 (distance builder) として活用しうる資源となることとの類推から考えることができるだろう。「慇懃無礼」ということばもあるが、丁寧な表現が表面的には丁寧なスタンスやアフェクトを指標しながら、相手との距離を生み出し、Brown と Levinson (1987) の枠組みで

言えば、ポジティブな面目、つまりは連帯的な願望（井上 1999）に反するという意味で、無礼、もしくは否定的なスタンスを指標することになるのである。

このようなメカニズムは日常の我々のコミュニケーション上の資源として活用されるが、上の (7) から (10) に至る表現群はそのような資源が活用され、語彙化して定着していく過程に対する洞察を与えてくれるものとみることできるかもしれない。またそれはこれらの表現群がもつ相互行為性が語彙化していく過程とも見ることができるだろう。

6. おわりに

本稿で問うてきたことは、日本語のいくつかの表現群がスタンスやアフェクトの指標に二義性、多層性をもち、言語使用主体がコンテキストとの関わりにおいて、それを資源として用いるありようであった。井上 (2003) では、顕在的潜在的レパトリーの一つとして、ある特定のコンテキストにおいて立ち現れる、ある特定の言語的実現を、コミュニケーションの主体が利用しうる資源、いわば言語の生態学的情報の一部としてみる言語観、コミュニケーション観を提案したが、本論もその延長線上に議論を展開することが可能であろう。いわゆる相互行為の社会言語学は、コミュニケーションという動態を、コンテキストという外在的要因がただ外部からコミュニケーションの主体に制約を与えるだけではなく、同時に主体自身が改編をせまっていくことでコンテキストを作り上げていくというコンテキスト観の革新を成し遂げた。しかし、重要なことはさらにそのコンテキストの生成そのものに資する利用可能な資源とそれへの制約を見きわめる必要があることである。そのような資源と制約はあらゆる言語に等しく与えられているわけではないのである。

ドアノブが人に手で握られるべく、握るという行為をアフォードしているように (Gibson 1979, Reed 1996)、ある特定の言語における言語アイテムや言語上の特性がこれまで見てきたような装置として用いることをアフォードしているという比喩は、現時点ではいささか突飛に聞こえるであろう。しかし、ギブソンらの生態心理学がモデルとしている、個々の有機体の行動が周囲のアフォード

ンス群の選択圧によって生み出され、そのアフォーダンス群との関係によって調整されるという図式は、言語を取り巻くコミュニケーションの環境の図式と無縁ではないように思われる。社会との関わりの中で言語、コミュニケーションを論じようとする時に、それらを刺激や原因が引き起こすものとするアプローチには明らかな限界がある。あるコンテキスト情報がある表現を用いるべく刺激を与えているというような視点とは別の視点が必要であろう。生態心理学は主張する、環境は行動を引き起こすのでも、刺激を与えるのでもなく、行動をアフォードしているのだと。本論で見ようとしてきたのは、ある表現群に内的に備わっていると考えられるそのアフォーダンスであった。

本論では相互行為の社会言語学の枠組みにありながら、実際の相互行為に事例をもとめず、日本語のある表現群が本質的にもつ相互行為性そのものを問題としてきた。また、ある表現群については、語彙化のプロセスにそのような相互行為性が見られる可能性を示唆するものとして論じてきた。

このような視点に立った社会言語学はたんなる自律的な言語学のカウンターパートでなく、コミュニケーション活動全体を視座においた、より統合的な言語研究に寄与しうるものを目ざすべきであろう。

参考文献

- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press.
- Duranti, Alessandro and Goodwin, Charles. 1992. *Rethinking Context: Language as an interactive phenomenon*. Cambridge University Press.
- Gibson, James J. 1979. *The Ecological Approach to Visual Perception*. Houghton Mifflin Company.
- Gumperz, John J. 1982. *Discourse Strategies*. Cambridge University Press.
- Hayashi, Reiko. 2001. "Reconstructing Indexicality in Japanese Interaction" The First Seoul International Conference on Discourse and Cognitive Linguistics: Perspectives for the 21st Century. pp. 684- 697.
- 2002. "Vagueness in Not Always Polite: Defensive Concession in Japanese Everyday Discourse." In Ray T. Donahue, (ed.) *Exploring Japaneseness on Japanese Enactments of Culture and Consciousness*. Ablex Publishing. pp. 369- 382.

- Hymes, Dell. 1974. *Foundations in Sociolinguistics: An Ethnographic Approach*. Tavistock.
唐須教光訳「ことばの民族誌—社会言語学の基礎」紀伊国屋書店
- 井上逸兵 1999. 「伝わるしくみと異文化間コミュニケーション」(南雲堂)
—2003. 「コンテクスト化の資源としての呼称—言語とコミュニケーションの生態学
への試論」『社会言語科学』6 (1): 19-28 (社会言語科学会)
- 片岡邦好 2002. 「指示的, 非指示的意味と文化的実践—言語使用における「指標性」
について—」『社会言語科学』4 (2): 21-41. (社会言語科学会)
- Ochs, Elinor. 1990. "Indexicality and Socialization." In J.W. Stigler, R.A. Shweder, G.
Herdt (eds.) *Cultural Psychology: Essays on Comparative Human Development*.
Cambridge University Press.
- Reed, Edward. 1996. *Encountering the World: Toward an Ecological Psychology*. Oxford
University Press. 細田直哉訳 佐々木正人監修「アフォーダンスの心理学—生態
心理学への道」新曜社 2000年.
- Sacks, H., Schegloff, E. and Jefferson, G. 1974. "A simplest systematics for the
organization of turn-taking in conversation." *Language* 50 (4): 696-735.
- Scollon, Ron & Suzanne W. Scollon. 1995. *Intercultural Communication: A Discourse
Approach*. Blackwell.
- Silverstein, Michael. 1976. "Shifters, Linguistic Categories, and Cultural Description." In
K.H. Basso and H.A. Selby (eds.) *Meaning in Anthropology*. University of New
Mexico Press. pp.11-55.
- 徳地慎二 2001. 「社会と言語を繋ぐ意味について」『社会言語科学』4 (1): 68-80. (社会
言語科学会)
- 湯川純幸 1999. 「言語的相互行為における情緒的および認知的スタンスの標示—オー
クスの指標性のモデルと日本語談話分析」『日本語の地平』(くろしお出版) pp.
401-412.